

「廃屋」も評価して復元を

どこにでもある小屋とは違います。すべてを再生することは理想的だと思いますが、現実的ではありません。

—世界文化遺産登録をめざす富士山で、吉田口登山道のふもとから5合目までの廃屋をどうすべきかが問題になっています。

信仰の山としては全体が構成資産になる。そう考えると廃屋を悲惨な状態のままにしておくことが、まず信じられないです。何度もこの登山道

を登りましたが、この5合目までの道は最高です。森の中を通り、木のすき間から山頂

が見えるチラリズムがある。森を突き抜けて5合目までゆくと、丸裸の富士山がどんと立ちはだかる。富士を見ながら登ること自体が、富士山信仰のスタイル。建物は、その拠点として重要です。

—すでに富士吉田市でも

遺跡調査をし、十分、重要性は認識されています。

それは承知しています。だが、どう保全し、どう伝えていこうとしているのか、まったく見えません。もっと議論を広げて信仰の山の富士の意味や意義は何か、何を後世に残したいのかを考えるべきです。

—現在は、ふもとからの登山者はほんの一部。多くは有料道路の富士スバルライン

信仰の山、富士山の整備

—世界文化遺産登録を利用して5合目まで車で行きます。森の中を通って宗教性を高めていく修行のプロセスが崩れてしまっている。山としての宗教性を国民に学んでもらおうとするなら、復元しないとまやかしの遺産になってしまふのではないでしょう

か。 —とはい、個人所有の建物も多いです。個人で再建し、維持管理するには現実的に厳しいのでは。

信仰の山として、かつて多くの人が登った吉田口は「本道」です。そこを整備しなくては、世界文化遺産としての意味はわからないのではないかでしょうか。国や地元行政など、すべてが一体となつて再生プランを先につくるべきです。そのうえで資金的な問題や探算性、法的な問題、誰が主体となるのかなどを議論すべきです。イコモス（国際記念物遺跡会議）の調査で、こうした現状がどう指摘されるか。それが心配です。

—廃屋は景観や登山者への安全の面から撤去した方が良いと指摘もされます。

今ある廃屋も富士山の文化的価値の証拠として、意味があるのだと思います。世界文化遺産をめざすというのであれば、すぐには言いませんが、いすれば建て直すといふ意思を持ち、危険性を考慮し、学術的評価もしたうえ

で、復元してゆくべきです。高度成長があり、5合目まで車で行けるようになつたことが、宗教の山から観光の山に切り替わつてしまつた転換点であります。文化遺産に登録されれば、世界中から専門家も含めて多くの人が訪れます。目先の問題だけではなく、長期的な視野で考える必要があります。

渡辺教授のいう「最高の登山道」に違いない。ただ、そこで目に入る廃屋が気になるのも事実だ。歴史的価値もある。所有者にとっても代々受け継いできたものを手放すことも、費用をかけ撤去することも簡単ではない。

すべてを修復・再建し、保存するのが理想ではあるが、自主的に進めるのは難しい。残念なことに、この

問題が専門家を交えた「長期的な視野」を持って議論されてきたとは言いたがたい。

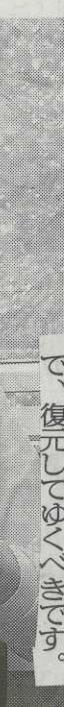
保存するのか、撤去するのか、両論ある。イコモスの現地調査を今夏にも控え、地元の富士吉田市が批判の矢面に立たされている。だが、国や県、所有者らに責任はないのだろうか。「見て見ぬふり」をしてきたのは、市だけではないはずだ。（菊地雅敏

「見て見ぬふり」責任は

足を使った富士登山は、今では5合目から始めるのが当たり前。富士スバルラインの開通で廃れた登山道に残る廃屋は、世界文化遺産の登録をめぐり、何度も話題に上ってきてはいた。

天気の良い日には、ふもとから5合目までの登山はとても気持ちが良

単刀直入



わたなべ・とよひろ 1950年、秋田県生まれ。東京農工大農学部卒。73年に静岡県庁に入り、農業基盤整備事業の計画実施などを担当した。2007年に東京農工大大学院連合農学研究科で農学博士号を取得。08年から都留文科大文学部社会学科教授として市民活動論や富士山学を教える。